

## あとがき

本書の原型は、同志社大学大学院法学研究科に提出した博士論文『石橋湛山の政治思想——思考方法から読み解く』（2012年3月博士〔政治学〕授与）である。しかし構成を大幅に変更している。また各章は既発表の研究論文を基にしているが内容を圧縮し、さらに重複箇所を削り、注を中心に加筆している。なお既発表論文との対応関係は以下のとおりである。

- 第1章 「石橋湛山の日蓮論」, 『同志社法学』61巻3号（2009年）  
「石橋湛山とキリスト教——道徳的使命観との関係を中心に」, 『ビューリタニズム研究』8号（2014年）
- 第2章 「石橋湛山の思考方法と哲学」, 『同志社法学』63巻2号（2011年）
- 第3章 「石橋湛山と天皇制——ゆるぎない国民主権論と天皇制肯定の相対関係」, 『自由思想』109号（2008年）
- 第4章 「石橋湛山と「自主外交」——戦後の対外論を中心に」, 『甲斐』125号（2011年）  
「石橋湛山の二つの《問い》——《日本からの問い》と《日本への問い》」, 『自由思想』130号（2013年）  
「石橋湛山の一九二〇年代における対外論の再検討——二つの使命観を手がかりに」, 『政治思想研究』14号（2014年）  
「「対米自主」の思想」, 出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』（法律文化社, 2015年）
- 第5章 「The Oriental Economist 研究序説——創刊初期を中心に」, 『同志社法学』69巻3号（2017年）  
「The Oriental Economist 最新号広告一覧（一九三八年）」, 『同志社法学』69巻4号（2017年）  
\*本章はJSPS 科研費JP15K16993（研究課題「戦時期日本の英文雑誌に関する基礎的研究」）の助成による成果の一部である。

筆者が石橋湛山を初めて知ったのは高校時代である。その後、大学1年次に西田毅先生の「日本政治」を受講し、その中で石橋が取り上げられた。講義後に石橋に関心がある旨をお伝えしたところ、先生は「湛山は興味深い人物で

す。是非勉強しなさい」と言われた。「背中を押された」と勝手に理解したが、この誤解がなければ『石橋湛山全集』を手取ることもなかった。その後、先生のゼミに入り、修士課程でもご指導いただいた。筆者が修士課程を修了した年度に先生はご退職されたが、それ以降も研究活動に関わる数多くの機会をいただいたり中国旅行にも同行させていただいたりした。博士課程では出原政雄先生にご指導いただいた。先生が指導された大学院生の中で最も手を煩わせたのが筆者である。筆者の視野が狭くなると、複眼的に物事を捉えることの大切さを必ず説かれた。先生には在学中のみならず大学院修了後も研究や教育に関わる多くの機会をいただいた。博士論文の審査では富沢克先生に副査を務めていただき有意義なご指摘を頂戴した。

筆者は大学院在学中より研究テーマが近接する先輩方と接する場面に恵まれた。萩原稔氏、平野敬和氏、織田健志氏には「思想と文化」研究会をはじめとする研究会や読書会などに加えていただいた。研究に真摯に向き合う先輩方の姿勢を見るたびに「自分もかくありたい」と思ったことは数知れない。銭昕怡氏には中国での共同パネル（米原謙先生、藤村一郎氏、何鵬拳氏）で報告の機会をいただいた。

長妻三佐雄先生、竹本知行氏には教育に携わる機会をいただくとともに研究や趣味などをざっくばらんに語り合う時間を共有させていただいた。小出輝章氏には教育に携わる機会のみならず筆者がアスリートとして輝ける場も紹介していただいた。

石橋研究関連では姜克實先生に筆者の修士論文を石橋湛山記念財団に推薦していただいた。これが筆者の最初の発表論文である（本書第3章の原型「石橋湛山と天皇制」）。増田弘先生には立正大学石橋湛山研究センター主催の研究プロジェクト（石橋の戦時下言論研究プロジェクト）に加えていただいた。プロジェクトは先に増田先生、池尾愛子氏、上田美和氏、鈴木祐輔氏により開始されていたが、途中参加の筆者を温かく迎えてくださった。浅川保先生には2006年に初めてお会いした。当時より石橋の著作を読む会や講演活動、また姜先生や増田先生を講師とするシンポジウムなど石橋の思想や言論を積極的に紹介されていた。山梨県内で石橋の知名度が高まった要因の一つが浅川先生の長年にわたる活動であることは疑いない。

石橋研究以外にも研究会や学会などを通じて多くの方々のご縁に恵まれた。特に赤澤史朗先生、沖田行司先生、中谷猛先生、米原謙先生、故和田守先生にこの場をお借りして御礼を申し上げたい。

筆者は大学院在学中より関心の赴くままに色々なことに首を突っ込んだが、その一つが沖縄密約をめぐる情報公開訴訟である。西山太吉氏と知り合ったのがきっかけである。西山氏は今でも時折筆者を叱咤激励してくれる。

本書の出版に際して法律文化社の八木達也氏に大変お世話になった。八木氏とは2019年3月にお会いしたが、実は出原ゼミ出身であり、筆者がティーチングアシスタントを務めていた時代にゼミの懇親会で一度会ったという。「これも一つの縁かもしれない」と感じて本書をまとめる気持ちを固めた。筆者が予定通りに作業を完了できず八木氏には度々ご迷惑をお掛けした。何とか出版にまでたどりつけたのも八木氏の導きがあったからである。この場を借りて御礼を申し上げたい。

これまでのところ「詩人のような澄んだ心を持ち、歴史に名を残すような人間になってほしい」という両親の名前に込めた想いに全く応えられていないが、やりたいことに邁進した一つの証として本書を届けたい。また大学進学に伴い一人暮らしを始めた筆者に自家栽培の野菜を届けてくれ、帰郷の折には到着時間から逆算して早朝から手打ちうどんを仕込んでくれる父方の祖母にも届けたい。残念ながら本書を届ける前に旅立った母方の祖母とすでに旅立っておそらく好きなお酒を手に見守ってくれている二人の祖父の墓前に手向けたい。最後に夜中にランニングに出かけ、体調が不調だったり足を負傷したりしても「走れば治る」と不可解なことを言ったり、おもむろに「みんなで筋肉体操」の動画を再生してトレーニングを始めたたり、自由気ままな夫の生き方を最大限に尊重してくれる妻に感謝したい。

本書の出版に際しては「同志社大学法学部2020年度法学会出版助成（B）」の助成を受けた。

2020年7月

望月詩史